

大明小学校 校長室から

2019年4月24日

No. 5

文責 校長 飯久保一男

子どもたちの頭には疑問がいっぱい

「校長先生はミニバスの監督してるの?」「校長先生の好きな食べ物は?」「校長先生の前の学校は…?」子どもたちとの出会いの4月当初、子どもたちが私にかけてくる言葉はほとんどが質問でした。興味のあることには、子どもはたくさんの疑問をもちます。私にはあまり興味がないのか、質問攻めとはなりませんでしたが…。

小さい子どもは、何にでも疑問にもち、親や大人に質問します。

「ねえ、あれなあに?」「〇〇ってなあに?」「どうして〇〇は、□□なの?」

親も大人もはじめは喜んで答えますが、これが、四六時中続けると、だんだん面倒になり、つい軽くあしらったり、適当な答えでごまかしたりして、その場を逃れてしまいがちです。

小学校に入ると、質問がレベルアップしてきます。しかし、いつしか気づくと、だんだんと質問をしなくなってしまふものです。自分で考えるようになる、調べられるようになるということも理由ではあると思いますが、多くは、真面目に答えてもらえなかった親(大人)へのあきらめです。聞いても答えてくれなかったり、いい加減な答えをされていたりしたら、私たちでもその人には聞かなくなりますよね。ちゃんと聞いて答えてくれる担任には子どもたちはどんどん疑問をぶつけてきます。6年生であっても、本当は、いろいろなことを聞きたいのです。疑問がヤマほどあるのです。親や大人でも答えられないような、難問もたくさん抱えているのです。



真偽は不明ですが、ニュートンがリンゴが木から落ちるのを見て疑問に思い、万有引力を発見した逸話は有名です。当初ニュートンの疑問に対して、周りの人はそんなことは当たり前だと相手にしなかったという話も伝えられています。

発明王エジソンに教育をし、励まし、実験の楽しさを教えたのは、エジソンの母だそうです。何度も失敗をしてあきらめようかと思ったときに、エジソンは自分のことを理解してくれている母を喜ばせたいと思い、あきらめずに粘り強く取り組んだということです。

「こんな大きな木も、もとは小さな種だったんだよ…」こんな会話から、話はふくらむかもしれません。子どもが興味をもつ・もたないは別として、親や大人は、子どもに刺激を与え続けることが大切です。どこかで子どもの興味にヒットし、それがふくらんでいくかもしれません。

「なぜ空は青いの?」「地球は何を原動力として回っているの?」

これらの疑問に正しく答えられる大人はどのくらいいるのでしょうか。子どもの疑問は、そんなものばかりかもしれません。子どもの疑問に答えられなくていいのです。わからないときには、知ったかぶりをしないで、「一緒に調べてみようか…」という姿勢も大切だと思います。ちょっとした大人の一言が、子どもに疑問をもたせ、いろいろなことに興味や関心を抱かせます。それが、『ものを考える』ことにつながっていくのです。以前に有名な教育学の先生に、本物の学力を一言でいうと何になりますかと尋ねたことがあります。その先生は一言でこう答えてくれました。

「問う力です」

10連休はどこかへお出かけですか? 出かけたとき、いろんなものを見て子どもは疑問をもちます。そのときこそ「考える力」を育てるチャンスです。子どもの疑問を大切にしてほしいと思います。